

「うはなり」「こなみ」の諸相 (1)

—平安時代を中心に—

Various phases of “Uhanari” and “Konami” (1)

—Focusing on the Heian Period—

片山 剛¹

要旨

夫が新たに別の妻を持つ場合、元の妻を「こなみ」、後の妻を「うはなり」と言った。そして「こなみ」はしばしば「うはなり」を憎むあまり暴力を振るう（あるいは人を使って振るわせる）こともあった。これが「うはなり打ち」である。しかし「こなみ」と「うはなり」が仲睦まじいこともありえ、たし、「うはなり打ち」がおこなわれる場合でも時代によってその性格は異なっていたようで、また同じ時代でもすべて同じようにおこなわれたわけでもなかった。本稿では、平安時代の文学を中心にしつつ、前後の時代にも目配りして「うはなり」「こなみ」の様相をたどる。

キーワード：先妻、後妻、嫉妬、諍い、平安時代

First Wives, Second Wives, Jealousy, Conflict, Heian period

はじめに

男女関係に嫉妬はつきものだが、それが昂じて暴力沙汰になることも古今東西を問わず珍しいことではない。精神的な暴力もあれば実際に腕力に物を言わせる「濫行」もある。

その中でも夫が自分以外の女性と親密な関係になった場合、自分を見捨てて新たな女性と婚姻関係を持った場合などに、相手の女性に対して暴力的な行為をおこなうことを「うはなり打ち」といった。言葉自体はすでに知っていたが、山中裕先生のご指導による『御堂関白記』の研究会（京都・思文閣会館）で「宇波成打」という藤原道長自筆の文字に出合って強い印象を受けて以来、それに関する史料を集めるようになった。桃裕行氏¹⁾、大間知篤三氏²⁾などの先行論文も参考にさせていただいたが、諸史料を博搜、読解、整理された川口素生氏³⁾の労作（ただし内容に「うはなり打ち」以外の「ストーキング行為」を含む）は特に大きな力になった。本稿は、諸先学の業績を力としつつも、異なった視点から、主に平安時代の文学に焦点を当てて「こなみ（先妻）」と「うはなり（後妻）」の諸相について覚書として記しておくものである。

1 上代の「うはなり」「こなみ」

「うはなり」は「後妻」とも書かれるように、ある男性があらたに親密な関係になったり婚姻関係を持つようになったりした女性のことである。『和名抄』は「後妻 宇波奈利」と記しているが、その語源は明確ではない。ただし、『和名抄』が「後夫」について「宇波乎」（うはを）と記していることから、「うは」は「上塗りをする」などの「上」と同じで「もとのもののあと」の意味であろう。男性が「うはを」なら女性は「うはめ」でもよさそうだが、そうはいわなかったらしい。一方、もとの妻は『和名抄』が「古奈美」（こなみ）としており、前夫の「之太乎」（したを）とはやはり異なった言い方になっている。語源の不鮮明さも手伝ってか、江戸時代になると「前の妻をうはなりといふ、後添の事をこなみといふ」（小山田与清『松屋筆記』）のような誤解も生まれるようになる。

それはともかく、前妻が後妻に対して抱く嫉妬が「うはなり妬み」で、何らかの形で暴力的に攻撃することが「うはなり打ち」である。「うはなり打ち」にあたる行為は現代でもまみ見られるが、こういう場合、多くの女性は夫ではなく相手の女性に危害を加えたりその生活の場を破壊したりす

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2017年9月8日

る。本来咎められるべき夫の浮気を責める以前に、夫と浮気相手の生活を破綻させることで夫を取り戻そうとする意思のあらわれであろう。

上代の「うはなり妬み」「うはなり打ち」については、川口氏前掲書に加える史料は持たないが、見解を異にする点もあるのでいくらか触れておく。

『古事記』における「うはなりねたみ」「うはなり打ち」というとスセリビメとイハノヒメの名が挙がるのが常である。

オオクニヌシはスサノヲの娘スセリビメと見初め合い、いくつかの試練を経てスサノヲの命によって「適妻（むかひめ。嫡妻、正妻）」とする。一方、すでにオオクニヌシの子を産んでいたヤガミヒメ（八上比売）は、オオクニヌシに連れられて出雲に來たが、「其の適妻須世理比売を畏みて、其の生める子をば木の俣に刺し挟みて返りき」（『古事記』上）という具合に、スセリビメを「畏（かしこ）」むあまりに子を置いて逃げ去ったのである。前後関係で言うなら、ヤガミヒメはスセリビメより早くオオクニヌシに出会っており、スセリビメのほうが「うはなり」の位置にある。しかし「適妻」の位置にあるスセリビメのほうが立場は優位だったのである。もっとも、スセリビメはヤガミヒメに何らかの具体的な攻撃を加えたとか、脅迫したというようなこと書かれておらず、あくまで嫡妻の威光に対してヤガミヒメが自発的につつしんで立ち去ったという記述になっている。

のちにオオクニヌシが出雲から大和に行こうとしたとき、「適后須勢理比売、甚だ嫉妬為き」と『古事記』は記し、さらにスセリビメの「あなたは男性だからあちらこちらに妻を持つのでしょうか、私は女性だから男性はあなただけです。夜具の中で私の柔らかな胸や腕を抱いておやすみになってください」という内容の歌を書きとどめている。オオクニヌシはその歌を聴いて足を止め、二人は出雲でむつまじく鎮座することになる。この「嫉妬」は、いわば夫を止めるための女性の知恵であり、また夫の側もこういう姿勢を示された場合は妻を傷つけることなく巧みに対処する。こういうところがオオクニヌシの王者としての面目ともいえるのではなからうか。「スセリ」の名は父の「スサノヲ」と同じく「すさぶ」あるいは「すすむ」と同根と考えられるが、それなら「おのずと湧き上がる勢いに乗って行動する」という意味⁴⁾を内包することになる。事実彼女はオオクニヌシとの出会いに際して積極的に愛情表現をし、父のスサノ

ヲがオオクニヌシに対して課したさまざまな難題にもすぐれた解決策を提示するなど、聡明で意思の明確な、行動的な人物といえる。そしてこの「嫉妬」もまた彼女の「おのずと湧き上がる勢いに乗った行動」であろう。「甚だ嫉妬為き」という『古事記』の記述から、彼女は嫉妬に狂う烈女のように見られることもあるが、はたしてそう言えるのであろうか。

『古事記』に見える女性でもっとも「うはなり妬み」の激しい人という、むしろ仁徳天皇の皇后のイハノヒメ（石之日売、磐姫）であろう。

其の太后、石之日売命は嫉妬（うはなりねたみ）すること甚（いと）多し。故、天皇の使へる妾（みめ）は宮の内を臨むこと得ず。言立つれば、足もあがかに嫉妬しき。（『古事記』下）

太后の嫉妬が激しいので女性たちは宮の中に入れず、女たちが何か特別なことを言おうものならイハノヒメは足で地面に搔くようにして口惜しがった（「あがかに」は「足搔かに」の意）、という。

仁徳天皇は吉備のクロヒメ（黒比売）の美貌の噂を聞いて妃にしようとしたが、クロヒメは都まで来たものの、イハノヒメに恐れをなして逃げ帰ってしまう。絶対的な嫡妻の威光を畏怖して自らの意思で逃げ帰るという意味ではスセリビメとヤガミヒメの関係に似る。ただし、イハノヒメの凄まじさはこのあとにある。天皇が舟で帰ろうとするクロヒメを見て「沖方には小舟連らくくろぎやのまさづ子我妹国へ下らす」とクロヒメへの未練を詠むと、激しく怒ったイハノヒメは人を遣わしてクロヒメを舟から下ろし、陸路を帰るように命じたと言うのである。

また、イハノヒメが紀伊に御綱柏（みつながし）は。酒宴の酒器に用いる）を取りに行っている間に、天皇はかねて望んでいた八田若郎女の結婚を果たす。するとイハノヒメは、

大きに恨み怒りて、其の御舟に載せたる御綱柏をば悉く海に投げ棄てき

という行動を起こし、さらに天皇のいる高津宮ではなく山城に入り、そのまま二度と戻ることはなかったと言う。クロヒメに対しては「うはなり打ち」に近い仕打ちを命じ、応神天皇皇女、すなわち仁徳天皇の異母妹という高貴な出自（イハノヒメは葛城氏）の八田若郎女の屈辱的な件では、「逃げ」の姿勢ではあるものの、天皇へのせめてもの抵抗を全うしているのである。

王者たる夫たちは、色好みという面は否定しな

いとしても、子孫を繁栄させるべく多くの女性との関係を持つことをやめなかった。それに対して大后たちは、その絶対的な力、他者を寄せ付けない力で「うはなり」を圧倒することがあり、時には切々と思いを訴えることで夫の心を翻させることもあった。一方、敗者の立場に立とうものなら自らのプライドを守ろうとして遁世のような消極的でありながらも激しい抵抗を徹底したのであった。こういう女性たちを、しばしば言われるような「嫉妬深い悪妻」と見なして済ませることはおよそ適切ではないように思えてならないのである。

2 平安時代の「うはなり」「こなみ」（1）

『詩経』「国風・周南」に「蠡斯」という詩がある。「蠡斯」はイナゴのことで、多産のイナゴにあやかっけて子どもに恵まれ、家が栄えるように願うのが本来の意味だとされる⁵⁾。しかし、その詩序には「蠡斯は、后妃の子孫衆多なり。言ふところは蠡斯の若く妬忌せざれば即ち子孫衆多なり」とある。「蠡斯の詩は、(周の文王の) 后妃には子孫が多くあることを詠んだもので、イナゴのように嫉妬しないから子孫が多いのだ」というほどの意味(いうまでもなく付会されたもの)であろう。イナゴの嫉妬と詩経の解釈学の歴史については種村和史氏⁶⁾に詳細な論考があるので深入りはしないが、『俊頼髓脳』にも村上天皇と斎宮女御(徽子)の贈答歌に関して「后といなごといへる虫とは、物ねたみせぬものと、文に申したれば」とあるなど、少なくとも平安時代後期には『詩経』を出典とした言い伝えがいくらか知られていたことがわかる。そして平安時代末期の『宝物集』の諸本のうちたとえば七巻本の久遠寺本⁷⁾に「イナコ丸ノ類ハヒカ事ニなり侍リニケリ(イナゴと后妃が嫉妬しないというのは間違いということになったのです)」として「嫉妬する后妃」の例に挙げているのが村上天皇中宮の安子である。『宝物集』と同じ内容の話は『大鏡』「師輔」にあるので、そちらによって簡単に記しておく。

安子が弘徽殿の上の御局に、一方、宣耀殿の女御(藤原師尹の娘芳子)が藤壺の上の御局にいたとき、安子が覗くと芳子は「うつくしくめでたく」見えた。そこで安子はあまりの妬ましさに土器の割れたものを壁の穴から打ちつけたというのである。宣耀殿の女御といえは『古今集』の和歌をすべて暗唱して(『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅

の))、豊かな髪を持ち、まなじりの少し下がった「かたちをかしげにうつくし」い(『大鏡』「師尹」)才色兼備の誉れ高い人であった。それに加えて年齢的にも芳子ははるかに若く、安子の妬みはいくらかの劣等感と相俟って強いものであっただろう。ところが「かやうのことは女房はせじ(こんな乱暴は女のすることではあるまい)」として、帝は安子の同母兄弟である伊尹、兼通、兼家の差し金ということにして彼ら三人に責めを負わせ、謹慎させたという。男たちはいい迷惑だが、帝が直接安子を咎めなかったのは、「帝もいみじう怖ぢ申させたまひ」(『大鏡』師輔)というように、主張のはっきりしたこの女性を畏怖あるいは忌避してのことであると同時に「うはなり打ち」に向き合う際の男の「知恵」でもあったのだろうか。

なお、裏松光世『大内裏図考証』は清涼殿北側の弘徽殿と藤壺の上の御局の間に萩の戸を置くが、萩の戸は、古くは「東庭に面した一室」⁸⁾であって、二つの上の御局は隣接していたようである。

安子の嫉妬深さについては『栄花物語』「月の宴」の話もよく知られる。村上天皇は異母兄の重明親王の北の方である藤原登子(師輔女)に思いを寄せ、最初は登子の同母姉でもある安子のところに招く形で逢った。しかし頻繁に安子に頼むことはできず、女房を使いにして密かに逢うようになり、登子のための調度品なども作らせる。こうなるとさすがに安子は見逃すことができなくなる。

おのづからたびたびになりて、後の宮(安子)漏り聞かせたまひて、いとものしき御けしきになりければ、上もつつましようおほしめして、かの北の方もいと恐ろしう思し召されて、そのこととまりにけり。

ここでもやはり中宮の権威が登子を恐れさせ、天皇をも後ろめたく思わせている。ただし、このあと重明親王も安子も亡くなると、天皇は登子を入内させ、尚侍にしている。

『大鏡』「師輔」は安子について「おほかたの御心はいと広く人のためなどにも思ひやりおはしまし、あたりあたりにあるべきほどほど過ぎさせたまはず、御かへりみあり」といいつつ「心よりほかにあまらせたまひぬるときの御もの妬みの方にやいかがおほしめしけむ」と評している。寛大で配慮の行き届いた人であると同時に、心に納めきれないような事態になると激しく妬むところのある人だとうのである。

上記の藤原登子と交流のあった藤原道綱母は『か

げろふ日記』の中で夫の藤原兼家の関係する女性たちへのみずからの嫉妬心をあらわに描いている。

天曆九年(955)八月下旬に男子(道綱)を出産した道綱母は、その翌月に夫の新しい妻のことを知る。兼家が道綱母の邸から帰ったあとに残された箱に女への手紙があった。道綱母は「見た」ということを知らせようとしてその手紙の余白に「うたがはしほかにわたせる文見ればここや途絶えにならんとすらん」と書き付けておく。兼家が三日続けて来ないことがあった(三日続けて別の女に通うということは新たな結婚を暗示する)が、相手は町小路(今の新町通り)の女であった。兼家はかなり熱心に通って、二年後の天徳元年夏にはその女と同車して道綱母の家の前を通り、道綱母に「死ぬるにもがな」とまで思わせる。やがて女が男子を出産すると道綱母は「いと胸ふたがる(ひどく胸が詰まる)」のだが、さらに女から仕立てを依頼されたことがあり、さすがにそのときはあきれ返って「見るに目くるる心地する」と言っている。ところが、女に子どもができてからは兼家の愛情は薄れ、さらには産んだ子まで亡くなったと知ると、道綱母は堰を切ったように次のように記している。

- 命はあらせてわが思ふやうにおしかへしものを
思はせばやと思ひしを、さやうになりもてゆく
- ひがみたりし親王の落とし胤なり。いふかひなく
わろきことかぎりなし
- わが思ふには今すこしうちまさりて嘆くらんと
思ふに、今ぞ胸はあきたる

「生かしておいて自分と同じ思いをさせたいと思っていたらそのとおりになった」「世をすねたような親王の落とし胤というどうしようもない素性だ」「私の苦悩よりいくらかひどく嘆いているだろうと思うとすっきりした」と、容赦のない捨て台詞めいたことを書き連ねているのである。

この二年の鬱屈を振り返ると、せめてこれくらいの激しいことばを綴らないではいられなかったのであろうが、書いたからといって彼女の心のわだかまりが完全に氷解するわけではないだろう。河添房江氏⁹⁾が「その裏には、けっして癒されぬことのない悲しみ、嘆き、痛みが張りついているのである」と言われるとおりである。それでもなお筆を費やそうとするところに真実の表白たる日記文学の価値があり、その代表的な作品である『かげろふ日記』は果たして「あるかなきかの心地」を描きえたのではないだろうか。

もうひとつ、日記文学に触れておく。『和泉式部日記』は、「女」(以下、「和泉式部」と言う)と帥宮(敦道親王)の出会いから関係の深まり、そして和泉式部が宮の邸に入るところまでが描かれている。帥宮の北の方は藤原済時の娘であった。この人は、両親が成人後の面倒を見ないまま亡くなったので、姉の娥子(春宮居貞親王の女御)に劣らないように春宮の弟である敦道親王と結婚するように配慮されたと『栄花物語』「はつはな」は語る。「配慮」したのが誰なのか明確ではないが、親族、たとえば兄弟とも考えられる。しかし山中裕氏¹⁰⁾は「当時の風俗としては考えにくいことであるが(中略)中の君の意志で結婚したと書いていると解釈すべきであろう」とされ、『大鏡』「師尹」も「御心わざに」、つまり姉に負けまいと自ら進んで敦道親王と結婚したと書きとどめている。現実にはそういうことができるかどうかはともかく、いくらかでもそんなそぶりを見せたとするなら、かなり意思の明確な負けず嫌いの女性だったという想像ができる。

さて、『和泉式部日記』によると、和泉式部が宮の屋敷に入って北の対に落ち着いたとき、北の方は「こころづきなくて、例よりもものむつかしげにおぼしておはす(不愉快で、普段にも増してうとうとしいことだと思いいらっしゃる)」。そして「いとかう、身の人げなく人笑はれにはづかしかるべきこと(まったくここまで私を人並みに扱われず、物笑いになるようでは恥ずかしい限りだ)」と泣く泣く抗議する。そして、実家にいた姉の娥子から「我さへ人げなくなん(私まで人並みに扱われていないようです)」という手紙が届き、後日、かねて北の方が依頼していた兄たちの迎えに従って宮の邸を去るのである。『栄花物語』に「年月に添へて、御こころざし浅うなりもて行きて(年月が経つにつれて敦道親王の寵愛が浅くなっていった)」とある点を信じるなら、親王が和泉式部にのめりこんだ理由のひとつには夫婦仲の不和があったのかもしれないが、北の方は和泉式部には何ら攻撃的なことはしない。また親王に対しても押し黙るだけで、女房が「しばし、(親王を)懲らし聞こえさせたまへ」といっても「近うだに見聞こえじ」と背を向けるだけであった。これがおそらく道綱母にも通ずるこの当時の上流貴族女性の「うはなり」に対する一般的な態度だったのではなかろうか。

3 平安時代の「うはなり」「こなみ」（2）

しかし、物語、説話に目を向けてみると、そうも言いきれず、「こなみ」による「うはなり」の執拗な仕打ちが作品の重要なモチーフになることもある。

『源氏物語』「桐壺」の冒頭では、故按察大納言の娘の桐壺更衣が入内したあと、弘徽殿女御ら「はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方々」によって執拗に嫌がらせを受け、その心的攻撃に屈する形で更衣は結果的に命を落とすことになる。一種の「うはなり打ち」である。ただし、スセリビメやイハノヒメのように権威のある妻が「うはなり」を追詰め、駆逐するという点は共通するが、そこにとどまることなく、白居易『長恨歌』を下敷きにしつつ永遠の愛の物語に昇華させたところが『源氏物語』の文学としての特質であり、達成であったというべきであろう。

ところで、桐壺更衣ははかなく散った花として楊貴妃になぞらえられるが、皮肉なことに、その楊貴妃は嫉妬深い人であったらしい。彼女は玄宗皇帝に召された、若く美しい女を上陽宮に送り、その女は「紅顔暗に老いて白髪新たり」（白居易「上陽白髪人」）といわれるように白髪になるまで無為に過ごさざるを得なかったという。

『源氏物語』に戻る。「帚木」巻のいわゆる「雨夜の品定め」の中に頭中将が体験談を語る場面がある。かつて頭中将には、ひそかに通い始めた女があり、途絶えがちではあったものの忘れられない者と思っていた。ところが、親もなく心細い様子の子のこの女（のちに夕顔と呼ばれる）に対して、

この見たまふるわたりより、情けなくうたてあることをなむ、さるたよりありてかすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。

というできごとがあったという。「この見たまふるわたり」は頭中将の妻である右大臣の娘のことで、そのあたりからなにかひどいことを言ってきたことを頭中将は後になって聞いたというのである。光源氏たち複数の聴き手を前にするからか、妻や右大臣家を貶めるような強い口調ではなく、「見たまふるあたり」「うたてすること」「かすめ言はせ」など、やや漠然とした言い方になっている。しかし、のちの「夕顔」巻で、夕顔が亡くなった後に侍女の右近が

去年の秋ごろ、かの右の大殿より、いと恐ろしきことの聞こえまで来しに、物怖ぢをわり

なくしたまひし御心に、せむかたなく思し怖ぢて、西の京に御乳母住みはべる所になむ、はひ隠れたまへりし。

と回想していることでこのときの事情が裏付けられるのである。

「物怖ぢをわりなく」する、つまり過剰に怯える性格の夕顔は抵抗することなく遁走したため、実際に暴力的な「うはなり打ち」を受けることはなかったようだ。それでも、右大臣家という権威を振りかざしての「こなみ」側の脅迫は、イハノヒメに脅されたクロヒメに匹敵する戦慄を夕顔という「うはなり」に覚えさせたであろう。もちろんそれは「権威ある家柄の正妻」というだけではない。あの、桐壺更衣を苦しめて平然としていた弘徽殿女御の一族であることも忘れるわけにはいかないのである。

こうして夕顔は、湿地が多く、有力貴族はほとんど住まなかったという西の京に、人目に立たないように隠れ住んだ。これは「帚木」巻で頭中将が「跡もなくこそかき消ちて失せにしか（あとかたもなく姿を消してしまった）」と語ることと符合している。

右大臣側からの脅迫がどのようなものであったかはわからない。しかし「すぐにどこかへ立ち去れ。もし今後も関係を続けるならただでは済まない」という、暴力をにおわす内容であったことは想像に難くないし、従わなかったら生活を破壊するような濫行が実際におこなわれたのかもしれない。

その夕顔は「夕顔」巻において「なにがしの院」で頓死する。そのとき光源氏の夢に現れた女は「ことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそいとめざましくつらけれ（たいしたこともない女を連れておいでになって寵愛なさっているのがひどく目に余ってつらいのだ）」と言ったうえで、「御かたはらの人（夕顔）をかき起こさむとす」るのである。光源氏に恨みを言うばかりでなく夕顔に手を出そうとするのだから、夢の中のこととはいえ、まさに「うはなり打ち」といえるだろう。それではこの謎の女は「こなみ」なのであろうか。この女の正体については、前後の文の解釈とともに諸説あるが、この直前で光源氏が「六条わたり（六条御息所）」について「いかに思ひみだれたまふらん。うらみられんも苦しうことわりなり」と自責の念に駆られていることもあって、御息所の影が色濃く反映していると思われる。しかし、だからといってこの女がまさに御息所の生霊で、それが

寵愛される夕顔を憎んで「うはなり打ち」をしていると考えるのは性急だろう。萩原広道の『源氏物語評釈』は御息所の怨念とする旧来の注を否定して「たゞいとあやしくをかしげなる女の居たること、のみ思ふべし。此院にすめりけん変化のもの、あらはれ出たるさま也」と述べているが、この解釈が妥当なものと考えたい。頭中将の妻（右大臣の娘）が夕顔を脅したのは右大臣家の権威主義的な物の考え方ならではのふるまいで、のちの、葵の上に取り憑くときの御息所の苦悩を思えば、このような安易ともいえる形でプライドの高い御息所がそれをなげうって夕顔を虐待することなど考えがたい。

そもそも御息所へのうしろめたさを思いつめた直後にその生霊が現れたら、光源氏はまず彼女を思うであろうが、その気配はない。そしてのちにこの女はもう一度光源氏の夢に現れるが、そのとき彼は女の正体を「荒れたりしところに棲みけんもの」だと認識している。結局はその妖魔に光源氏の六条御息所へのうしろめたさが重なるように形成された夢が御息所に味方する立場から夕顔を苦しめたことになるのだろう。結果論で言うなら、右大臣家からの脅迫が形を変えて彼女を襲ったかのようなのである。夕顔という人はいかにも「うはなり打ち」に遭いやすい、素直で、臆病で、はかない境遇の人であったのである¹¹⁾。

それにしても、桐壺帝も頭中将も（このあとの光源氏も）とりたてて「こなみ」たちになんらかの非難も苦情も伝えることがないように見える。当時の「こなみ」と「うはなり」を考えると、男性の動向もまた注目されるのである。

「なにがしの院」のできごととはともかく、「桐壺」巻や「帚木」巻のように、優位にある「こなみ」が「うはなり」を攻撃する形が物語に見えるすべてというわけではない。

『伊勢物語』第23段は幼馴染の恋愛を描いた、いわゆる「井筒」の段である。相思相愛でめでたく結ばれた幼馴染であったが、女の親が亡くなるなどして生活が不如意になると、男は河内国高安に住む別の女に通い始める。ところが妻は誠実さを失わず夫を思い続け、その思いを和歌に詠む。そのようすを目の当たりにした男は感銘を受け、また河内の女が「手づから飯匙（いひがひ）取りて笥子のうつはものに盛」るような品のない女であったことがわかると男はいやになり、元の鞘に収まったのである。

中宮安子がそうであったように、概して若さや美しさにおいて「こなみ」は「うはなり」に劣等感を持つかも知れないが、一方「おとな」の風格や分別などは「こなみ」がまさることも多いだろう。たとえば『大和物語』141段に「こなみ」と筑紫から出てきた「うはなり」が親しく同居する話がある。夫が仕事の関係で留守がちであったため、女性二人で生活することが多かったのだが、そのうちに「うはなり」は別の男と浮気をする。それでも「いと心よき人」であった「こなみ」は咎めることもなく夫に告げ口もしない。また最終的に「うはなり」が筑紫に帰るに際しては山崎まで見送りに行って夜通し語り合ったあと、別れを悲しんでいる。「こなみ」が「心よき人」なればこそこの話である。

いささか時代が下るが、「心よき人」である「こなみ」が夫の愛を取り戻す話は『今昔物語集』にも見られる。

○下野の男が本妻を捨てて新しい妻をもうけ、家財道具などをすべて新しい妻のところに移した。ところが、最後に残った飼葉桶を持っていこうとする「まかぢ」という名の従者に本妻が「ふねも来じまかぢも来じな今日よりは憂き世の中をいかでわたらむ」（「ふね」は飼葉桶のことで、「かぢ」「うき」「わたる」などを縁語とする）という歌を託すと、男は感じ入り、本妻のもとに帰った。（巻30—10）

○長年連れ添った妻を捨てて新しい妻をもうけた男が難波で海松（みる）のついた蛤をみつけたので新妻に見せようとして小舎人童に送らせた。小舎人童が誤って本妻に届けると、本妻は大事に賞翫した。都に戻った男が新妻に蛤の事を問うと「届いていない。もし届いていたら蛤は焼いて、海松は酢に入れて食べてしまう」と言った。小舎人童が誤ったことを知った男が本妻から蛤を取り返させると、元の姿を保っており、しかも「あまのつと思はぬかたにありければ見るかひなくも返しつるかな」（「見る」に「海松」、「かひ」に「貝」を掛ける）という和歌が添えられていたため、男は感心して本妻のところに戻った。（巻30—11）

前者の末文に「然レバ情有ル者、此ナム有ケルトナム語り伝ヘタルトヤ」とあるように、いずれも和歌の心得のある本妻の風雅な心が男の心を打ったのである。後者の新妻の食い意地が張っているところは『伊勢物語』の河内の女に似通って、

三枚目の役回りになっている。

『今昔物語集』の例を挙げたので、ついでにもう一話（巻19-2）書き留めておく。「こなみ」の恨みが夫に向く例である。大江定基（962?~1034）が新しい妻を持つと本妻は嫉妬して去った。しかし定基の赴任先の三河で新妻は病死してしまう。定基は亡骸をそのままにしていたが、あるとき亡妻の口を吸うと悪臭がしたので無常を感じ、出家して寂照となった。乞食（こつじき）となって修行をしているとある家に招かれ、食事を出された。そこは本妻の家で、本妻は「乞食せむを見むと思ひしを（乞食する姿を見たいと思っていたらそのとおりになった）」と皮肉を言うのである。もっとも、深く発心していた寂照は「ありがたいことだ」といって動ずることはなかったという。

なお、「うはなり」「こなみ」の確執は中世の説話や物語になると、夫を含めて仏道とのかかわりがいっそう深くなるが、これについては続稿で述べるつもりである。

4 平安時代の「うはなり」「こなみ」（3）

「うはなり」と「こなみ」が安定した関係を保つ例としては『源氏物語』の紫の上と明石の君がある。

紫の上はこれといって欠点のない人でありながら、ただひとつ嫉妬深い点をしばしば光源氏から指摘される。たとえば光源氏三十二歳の冬、女性たちの人柄を批評した中で、

君こそは（中略）少しわづらはしき気添ひて、かどかどしさのすすみたまへるや苦しからむ（朝顔）

といって、紫の上の「わづらはしき気」を取り上げているが、これは主に嫉妬深さをいうのであろう。というのは、この少し前に光源氏は長らく執心している朝顔の姫君を訪ねるべく格別の用意をして出かけようとする場面があり、そこで紫の上は

見もやりたまはず若君をもてあそび、まぎらはしおはする側目（そばめ）のただならぬを（朝顔）

という具合に見向きもせずただならぬ様子の横顔を見せているからである。

さて、紫の上と離れて須磨、明石での謫居を余儀なくされた光源氏は、当地で明石の君と出会う。やがて都に戻る光源氏と別れた後、明石の君は女子（明石の姫君）を産む。隠しておくわけにもい

かず、光源氏は紫の上に

呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ（澪標）

と伝える。すると紫の上は顔を赤らめて

あやしう、常にかやうなる筋、のたまひつくる心のほどこそ我ながらうとましけれ（澪標）

と恨むのである。紫の上自身が、光源氏が常に「かやうなる筋」すなわち嫉妬について指摘していると言っているのである。

紫の上にとって、明石の君の存在自体が嫉妬の対象ではあるが、もうひとつ重要なのは子の存在であろう。一夫多妻の時代にあつて、「うはなり」が子を持つかどうか「こなみ」にとっては重大な関心を持たざるを得ないことであつた。光源氏は

おはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなむ（澪標）

いかにぞや、人の思ふべき瑕なきことはこのわたりに出でおはせで（薄雲）

と盛んに紫の上の子ができないことを残念がっているが、紫の上にとっては単に残念だとか寂しいというレベルにとどまらず、後半生の生き方に深く関わる問題としても重い意味があつただらう。それだけに、明石の姫君の五十日（いか）に際して祝いの品を贈った光源氏に明石の君から返事が来て、それを見た光源氏が長い嘆息をすると、「女君、しり目に見おこせて」と、紫の上はまたもや嫉妬の表情を見せるのである。

では紫の上と明石の君が打ち解けて円満な関係を築けたのはなぜだったのか。心理描写や構想力にすぐれたこの稀代の物語作者が、紫の上が「心よき人」であつたから、というような簡単な理由でお茶を濁すようなことをするわけがない。

まずひとつはやはり「子」の存在である。光源氏は明石の君に姫君を手放して紫の上の養女にすることを勧めた。それは格式の高い人の娘とすることで将来の娘の幸福（具体的には入内や立后）を念じたからだが、結果的にこのアイデアが紫の上と明石の君の壁を取り除くことになった。自分の身分以上の扱いをしていただけるならかまわなしいと言いながら明石の君は娘を手放すが、母としては悲痛な覚悟であつただらう。一方、二条院に迎えられた幼い明石の姫君は紫の上によくなつたので、紫の上は

いみじうつくしきもの得たり（薄雲）

と喜んだ。そして

今は怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり (薄雲)

と、かわいい明石の姫君に免じて明石の君の「罪」も許す心境になったというのである。しかし「罪」を許しただけでは良好な関係の形成にはつながるまい。

八年の歳月が過ぎ、十一歳になった姫君は春宮に入内するが、その折、紫の上ははじめて明石の君と対面する (藤裏葉)。そのとき紫の上が「疎々しき隔ては残るまじくや」と「なつかしく」声を掛けて二人は語らう。この話の中にはおそらくお互いのこれまでの苦悩やそれを克服して今に至った、共感し合える内容が多々含まれていたであろう。いうまでもなく相手を憎むような言葉は出なかったはずだ。そして明石の君が話をする様子などを見た紫の上は「むべこそは (なるほどのこの人なら光源氏が心惹かれるのも当然だ)」と、予想以上にすぐれた人であることに感心し、一方明石の君は「そこらの御中にもすぐれたる御心ざしにて、並びなきさまに定まりたまひけるもいとことわり (おおぜいの女性がいるのに、並び立つ人もないほどでいらっしゃるのも道理だ)」と思ひ知ることになる。こうして同年代の二人はお互いを認め合い、この対面が「これもうちとけぬる初めなめり」ということになるのである。

もうひとつ、二人の関係を安定させた大きな理由として「うはなり」である明石の君の生き方の知恵——徹底して謙虚に振舞うこと——がある。紫の上を前にした明石の君はいっさい出すぎたことをせず、たとえば春宮の女御になった姫君がわずか十三歳で出産した時は、直接の世話も紫の上任せ、自らは女房ながらに御湯殿の世話などを行っている (若菜上巻)。後述する敦成親王誕生のとき、新生児の祖母である倫子 (道長の妻) は臍の緒を切ったが、御湯殿の用意をしたのはすべて女房たちであった (『紫式部日記』)。

明石の君の性格については

らうらうじく気高く、おほどかなるもの、さるべき方には卑下して、憎らかにもうけばらぬ (若菜上)

と描かれている。つまり、気が利いて気高く、おっとりしているが、そうすべきときには卑下し、憎らしそうに勝手に振舞うようなことはない、というのである。こういう明石の君なればこそ、紫の上は親しみを覚えるのみならず「やむごとなく」思うようになる。「やむごとなし」は、ここではか

けがえのない、とても大事な人、というほどの意味であろうか。木村正中氏¹²⁾がこの二人の関係について「二人の女性が、それぞれ苦勞をかかえて生きてきた人生を顧み、お互いに複雑な感情を持ちながら、しかもそれだけにかえて、姫君のいとしさを相互補助的な共感としてしみじみと味わい、それを媒介としたなごやかな交情が成り立つ」と述べられたとおりである。

この当時の男性の立場から見た「こなみ」と「うはなり」の理想的な関係は、葵巻にいう「情け交はすべきもの」であった。そして子ゆえに嫉妬し、子ゆえに親しくなり、相手を見ぬうちは警戒し、出会ってからはお互いの人間性を認め合ったこの二人の仲らひは、その意味でも理想的なものなのである。

紫の上と明石の君とは逆に、「こなみ」に子ができた場合、「うはなり」の立場が苦しくなることもある。葵の上が懐妊したとき、六条御息所は「やむごとなきかたにいとど心ざし添ひたまふべきことも出できたれば、ひとつ方に思ししづまりたまひなむを」(葵)と思いつめている。正妻である葵の上に愛情が増すであろうようなこと (懐妊) ができたからにはそちらに落ち着かれるであろう、というのである。もし自分が先に光源氏の子を宿していたら、という思いもあったはずだが、出産したときすでに二十六歳であった葵の上よりさらに三歳年長であった御息所は、もはや自分が光源氏の子を持つことはないという思いを強く抱いていたであろう。

『源氏物語』の嫉妬の問題にはまだまだ多く触れるべきことがあるだろう。たとえば落葉宮をめぐる夕霧と雲居雁の喜劇的要素を含む家庭内紛争がある。しかし何よりも六条御息所と葵の上の関係を忘れるわけにはいかない。これについては本稿では触れず、続稿で能の「葵上」にからめて話題にしたい。

5 平安時代の「うはなり」「こなみ」(4)

平安時代の貴族社会で実際に「うはなり打ち」をおこなったことが記録されている人物としては、大中臣輔親の妻で、藤原教通の乳母となった蔵命婦 (「内蔵命婦」とも表記される) を忘れることはできない。川口氏もこの人物を「古代屈指の烈女」として大きく取り上げている。

蔵命婦の出自はわからないが、川口氏の言われ

るとおり、父親などが内蔵寮の官人であった可能性はある。内蔵寮は長官の内蔵頭でも従五位下相当官なので、せいぜい中流階級の出身であろう。「命婦」の呼称からも彼女が中臈女房であったことがうかがわれる。

蔵命婦が晴の舞台に姿を見せるものとしては『紫式部日記』の寛弘五年九月十一日、すなわち土御門邸における中宮彰子の敦成親王出産の場面があげられる。彰子が出産を目前にして寝殿の北の廂に移ったとき、人が多くては気分も悪くなるだろうというので「さるべきかぎり」つまり傍にいななければならない最小限の人のみが彰子に近侍することになる。その顔ぶれは彰子の母の倫子、讃岐宰相の君、そして蔵命婦なのである。彼女がこのメンバーに入ったのは上臈女房だったからというのではなく、新生児を取り上げるいわば助産師の役割をになうためであったと思われる。というのは、『栄花物語』「みねの月」の道長の末娘嬉子の出産の場面に「蔵命婦、いづれの御前たちの御折りも、まづもの上手に仕うまつるに」とあって、彰子、妍子などの出産に際しても取り上げの上手（名人）として仕えていたとされるからである。彼女は教通の乳母としても誠心誠意尽くしたようで、十三歳の教通が寛弘五年十一月二十八日の賀茂臨時祭の使いとなったとき、その凛々しい姿を見て「舞人には目も見やらずうちまもりうちまもりぞ泣きける」（『紫式部日記』）と感涙に咽んだほどであった。また教通の妻（藤原公任の娘）が若くして亡くなったときには精一杯慰め役を努めたことが『栄花物語』「後くるの大將」に記されている。このように、感情が表に出やすかったと見られる蔵命婦は「うはなり打ち」に関して当時屈指の「実績」を残しているのである。

以下、植村真知子氏¹³⁾による注釈を参考にしながらその状況を確認する。

藤原行成の日記『権記』に次のような記事がある。
自鴨院忠光走申云、西対有濫行、是左大殿権中将隨身并下女三十人許入乱云々、是彼君乳母蔵命婦所作也、仍參左府申案内、即差遣御隨身等、余亦向彼院、西対故兼業妻所居也、祭主輔親日者寄宿、為嫉妬彼命婦送人也、内雜物破損極非常也

（『権記』寛弘七年二月十八日条）

故藤原兼業の妻が住まいとする鴨院の西の対における濫行が行成に伝えられた。道長の子の左近権中将（教通）の隨身や下女三十人ほどが乱入し

て室内にある雑物をはなはだしく破損した。この邸には大中臣輔親が日ごろ「寄宿」していた、つまり故兼業の妻のところに居続けていた。そこで、輔親の妻である蔵命婦（教通の乳母）が嫉妬のあまり人を差し向けたというのである。行成が道長を訪問して事情を伝えたと、道長は隨身を派遣、行成もまた鴨院に向かったという。

人数が約三十人であったこと、その中には女性も加わっていたこと、「雑物」を激しく破損させていることなど、「うはなり打ち」の実態を伝えている点で貴重な資料である。時刻は明確ではないが、様子のわからない邸で濫行するのに夜ということはないであろう。

三十人の男女に押し寄せられたとあっては、何の予期もしていなかったであろう鴨院側は手も足も出せずに、相手のなすがままになっていたのではなかろうか。そもそも攻撃側の目的は輔親が訪問できなくなるようにすることであって、女あるじを傷つけることではないだろうから、被害者側は逃げるに如かずであったかもしれない。輔親の妻である蔵命婦の嫉妬ゆえの濫行が教通の隨身や下女によっておこなわれていることも、乳母という立場を考える上で注目されよう。

この「うはなり打ち」に関して道長は『権記』がいうように調査をさせているが、あいにく彼自身の日記には何も記していない。実は、この日のみならず、この前後の一月二十四日から二十六日間にわたって、彼の具注暦の余白部分（日記を書き込むところ）はすべて空白になっている。おそらく、次女妍子の春宮（居貞親王）入内が目前に迫っているため、その準備に多忙でそれどころではなかったであろう。

その二年後、寛弘九年（1012 十二月に長和と改元）二月二十五日には次のようなできごとがある。

候内、祭主輔親宅家雑人多至成濫行云々、仍遣隨身令問案内、辰時許事也、只今無一人云々、仍以家業令成日記、是蔵云女方宇波成打云々、家業件女方因縁、入夜日記持来、知面者只今一人者、可擲進由仰了

（『御堂関白記』寛弘九年二月二十五日条）

道長が内裏に伺候しているとき、大中臣輔親の邸に「家の雑人」すなわち道長家の身分の低い使用人が多数侵入して濫行に及んだという情報が入った。道長はすぐに隨身を派遣して事情を探る。事件が起こったのは辰の時の頃で、今はすでに誰一人いないという。道長は藤原家業を派遣して勘

問日記（事件の報告書）を書かせ、顔の知れた者を捕らえるように命じた。

この記事では事件が「辰の時」つまり午前8時前後に起こったと記されているのが興味深い。面白いがまだ早い時間帯である。

家業は三年前の『御堂関白記』寛弘六年七月六日条に「氏使官人連遠家業等」（「氏使官人」は「藤原氏の検非違使官人」の意）とあり、この時点でも検非違使官人だったと考えられる。そこでその職責として勘問日記を書いているのだろうが、彼が派遣されたのにはもう一つ理由があった。『尊卑分脈』の家業の子章経の注に「母祭主大中臣輔親女」、『続群書類従』177巻所収の『大中臣系図』に輔親の七女について「上野守家業妻」とあるように、家業はおそらく輔親と蔵命婦の娘を妻としていたのである。それが『御堂関白記』のいう「家業、件の女方の因縁なり」である。

このあと捕らえられたものが共犯者や事件の顛末を白状するのだろうが、その後の処分などについての記録はない。現代なら実行犯より首謀者がまず罪に問われるだろうが、二度の「うはなり打ち」があったにもかかわらず、蔵命婦は何ら処罰を受けた形跡はない。実行犯がなんらかの譴責を受ける程度で、夫婦間の問題は内々に解決せよということなのであろうか。『源氏物語』葵巻の車争いでも実力行使に出たのは葵の上側だが、だからといって葵の上が咎められることはない。

それにしても「うはなり打ち」の原因となったというので名前を記された大中臣輔親は名誉なことではないだろう。保坂都氏¹⁴⁾が「（輔親は）恋の世界の遍歴の経験も相当の武者であったことが想像される」「輔親の一生は情事に彩られていたものと察せられる」と述べられたように、この人物はかなり好色であったと思われるが、こういう記録が残ったことでもそれが実証されたことになる。

寛弘七年の時点で輔親は五十七歳になっている。蔵命婦の年齢はわからないが、娘が家業の妻となっていたとすれば孫があったかもしれない。吉海直人氏¹⁵⁾は、乳母になるときの年齢が従来二十歳くらいに安易に設定されてきたことに対して警鐘を鳴らされ、具体例が少ないものの「天皇家の場合は、三十歳くらいで考える方が妥当であろうか」と言われた。蔵命婦は教通の乳母で天皇家のことではないが、もし教通の乳母になった十四年前に三十歳前後であれば、このときは四十代になっている。

この年齢にして相変わらず次々と浮名を流す夫

とそれに対して激しい嫉妬を燃やして「うはなり打ち」をおこなった妻。こういう夫婦の若い頃はいったいどうだったのか、それを知るべき史料が残されていないのが惜まれる。

6 北条政子の「うはなり打ち」

『御堂関白記』に見える蔵命婦の「うはなり打ち」は貴重な記録ではあるが、道長という人はあまり興味本位に出来事を書かないこともあってその実態についてはよくわからない。『権記』はいくらか具体的に書かれているが、それでも明確というほどではない。このほか、古記録では藤原頼長の『台記』康治二年(1143)十一月七日条に「進士宗広妾[名児]上成打」という記事があるが、これは一切内容には触れられていない。そもそも「うはなり打ち」は私的な争いという面があり、人を傷つけるなどの重大な事件にならない限り貴族が日記に記すべきものではなかったのだろう。道長も「家の雑人」の「濫行」だったからこそ記したのであろうし、寛弘七年二月のように多忙であれば教通の随身のしわざであっても何も記さないのである。

詳細に「うはなり打ち」を記録したものには、時代が下るが、北条政子による「うはなり打ち」を書き留めた『吾妻鏡』がある。時代のみならず、都の貴族とはとは考え方も生活習慣も異なる関東でのできごとではあるが、本稿の最後にその例を紹介しておく。

武衛以御寵愛妾女〔号亀前〕招請小中太光家小窪宅給、御中通之際依有外聞之憚、被構居於遠境云々（中略）是妾良橋太郎入道息女也、自豆州御旅居奉昵近、匪顔兒之濃心操殊柔和也、自去春之比御密通追日御寵甚云々

（『吾妻鏡』寿永元年六月一日条）

武衛（兵衛府のこと。ここは前右兵衛佐であった頼朝）は愛妾であった亀の前を、外聞を憚って小中太光家の小窪（同年十二月十日条には「小坪」と記す。小坪は今の逗子市西部）の家に移し住ませた。良橋太郎入道の娘で、頼朝が伊豆に居たころから親密な関係にあった。きめ細やかな容貌のみならず、心ばえが柔和であった。昨春から密かに通じて日を追って寵愛がまさったのだという。

この亀の前に嫉妬の炎を燃やしたのは頼朝の正妻の北条政子である。寿永元年六月という政子は懐妊しており、八月十二日には彼女にとって初めての男子である頼家を産む。頼朝は妻が身ごもっ

て養生しているときに、ここぞとばかりにほかの女性に熱心に通っていたわけで、産後にそれを知った政子は激しく怒る。

御寵女〔亀前〕住于伏見冠者広綱飯島家也、而此事露顕、御臺所殊令憤給、是北条殿室家牧御方密々令申之給故也、仍今日、仰牧三郎宗親、破却広綱之宅、頗及耻辱、広綱奉相伴彼人、希有而遁出、到于大多和五郎義久鐙摺宅云々

（『吾妻鏡』寿永元年十一月十日条）

亀の前は伏見広綱の飯島（今の逗子市）の家に移っていた。それを北条時政（政子の父）の後妻である牧の方が密かに伝えたことによって御台所（政子）が激しく憤る。そこでこの日、牧の方の父（『愚管抄』による）の牧三郎宗親に命じて広綱の宅を破却させて恥辱を与えた。広綱は亀の前に従ってかろうじて逃れ、大多和五郎義久の鐙摺（あぶずり。今の葉山町）の家に走った。

牧の方が継子にあたる政子に報告し、牧宗親が「うはなり打ち」の指揮官となっているのだが、この牧の方という人物の動きが気にかかる。政子が必ず憤慨するであろうことを承知で密告して、その「あと始末」を自分の父に任せているのだから、すべてが彼女の筋書きどおりとすら見える。後年、時政は平賀朝雅の讒訴を入れて畠山重忠、重保父子を討ち、実朝を廃してその朝雅を将軍にしようとしたりした（政子や北条義時の阻止によって実現せず、時政は出家し伊豆に幽閉される）が、その陰には牧の方の存在があったようである。朝雅（牧の方の女婿）を将軍にしようとした件では『吾妻鏡』が「牧御方廻奸計、以朝雅為関東将軍」（元久二年閏七月十九日条）と記しているように、牧の方はかなりしたたかな人物であったことがうかがわれる。あるいは夫の時政を手玉に取るほどの力を持っていたかもしれない。

ところで「頗及耻辱」というのは具体的にどういふことがおこなわれたのであろう。二度と頼朝と会うなという強い脅迫がなんらかの暴力的行為（髪を切るとか、装束を剥ぎ取るとか）の形をとったのであろうか。

武衛寄事於御遊興渡御義久鐙摺家、召出牧三郎宗親、被具御共、於彼所召広綱被尋仰一昨日勝事、広綱具令言上其次第、仍被召決宗親之處、陳謝卷舌垂面於泥沙、武衛御鬱念之餘手自令切宗親之髻給、此間被仰含云、於奉重御臺所事尤神妙、但雖順彼御命如此事者、内々

蓋告申哉、忽以与耻辱之條、所存企甚以奇怪、宗親泣逃亡

（『吾妻鏡』寿永元年十一月十二日条）

頼朝は遊興という建前でその鐙摺の家に行き、牧三郎宗親を同行させる。広綱を呼んで一昨日の一大事について事情を問い、広綱は詳細に語った。そこで宗親を呼んで処決すると、宗親は陳謝、畏怖して、土下座する。しかし頼朝は、自分の手で宗親の髻を切り「御台所を重んじるのは殊勝だが、こういうことは内々に私に告げるべきだ。それをせずに恥辱を与えたのは甚だ奇怪だ」と言う。「うはなり打ち」を命じた政子ではなく、それをことわりもなしに実行した宗親が悪いという理屈で、哀れな宗親は泣いて逃亡したという。

この話はさらにこのあと宗親への処罰を不満に思った時政が伊豆国へ引き上げるという騒動にまで発展するのだが、この頼朝に対する抵抗もあるいは牧の方から時政に要請があつておこなわれたのではなかろうか。あえていうなら、この「うはなり打ち」の陰の主演は牧の方であつて、このときの彼女の鬱憤がのちに彼女が源氏を廃そうとする遠因のひとつになったと見るのはうがちすぎだろうか。

頼朝はそれでも亀の前を諦めず、ふたたび光家の家に住ませて寵愛し続けた。ただしそのときの亀の前の心境は「頻雖被恐申御臺所御気色・・・」（『吾妻鏡』寿永元年十二月十日条）というもので、政子の剣幕はただならぬものであつた。そして十二月十六日になるとあの広綱は遠江（広綱の出身地）に事実上の左遷となるのである。

このほかにも、頼朝が兄義平の後室であつた新田義重の娘に思いを寄せたものうまく運ばないとき、「義重元自於事依廻思慮、憚御臺所御後聞、俄以令嫁件女子於帥六郎之故也」（『吾妻鏡』寿永元年七月十四日条）ということがあり、また、藤原時長の娘が頼朝の子貞暁を産んだときも「密通」が露顕し、「御臺所御黙思甚、仍御産間儀每事省略云々」（『吾妻鏡』文治二年二月二十六日条）ということもあつた。政子もまた牧の方に劣らず負けん気の強い人であつたことがうかがわれよう。

都育ちの頼朝にとって権力ある者が複数の女性と関係を持つことはとりたてて咎められるべきことではないという認識だったのかもしれない。しかし、野村育代氏¹⁶⁾が言われるように「東国ではすでに一夫一妻が強く結び付いて家を構え、経営をともに行なう形が一般的になっていた」のであ

れば、時政父娘、特に政子にすれば頼朝の浮気は許しがたいことだったのだろう。この時期、源義仲は北陸にあって、翌年は倶利伽羅峠の戦い、篠原の戦いなどを経て都に入り平家を都落ちに追い込む。つまりこれからがいよいよ源平の決戦なのである。頼朝は鎌倉にいたからこそこのようなことができたといえようか。

政子の「うはなり打ち」の経緯をたどると、自らは手を下さず、責任は実行者に転嫁され、相手の生活を妨害し（家や調度を破壊する）、夫は他人事のように同じ事を繰り返すなど、時代も地域も異なりながら、蔵命婦のそれと似通った点が多く見受けられよう。

おわりに

おもに平安時代の文学作品に見える「こなみ」と「うはなり」の関係についてとりとめのないことを書き連ねてきたが、これ以後も「うはなり打ち」に類する行為は事実としても文学その他の分野でも続くのである。

紙数が尽きてしまったので、これ以後の事については別の機会に譲ることにする。中世の「うはなり打ち」は血なまぐさいこともあり、その一方で宗教的（仏教）な結末が描かれることも多くなるなどまた独自の姿を見せることになるだろう。さらには嫉妬をするのは恥ずかしいこと、という意識も高まり、それゆえに葛藤せざるを得ない女性の苦しみも描かれることがあるように思われる。

今後取り上げる予定のおもな素材を列挙して本稿を閉じる。

「沙石集」「十訓抄」(中世説話)「葵上」「鉄輪」「三山」「藍染川」(謡曲)「火桶の草紙」「さいき」「磯崎」「高野物語」(室町時代物語)

「七人比丘尼」「膏薬売洛英」「昔々物語」「骨董集」「烹雑の記」「葉隠」「心中天網島」「嫩」「和俗童子訓」(江戸時代) など。

文献、注

- 1) 桃裕行. うはなりうち(後妻打)考. 日本歴史, (35), 42-44 (1951)
- 2) 大間知篤三. 婚姻の民俗学(民俗民芸双書18). 岩崎美術社(1967)
- 3) 川口素生. ストーカーの日本史(ベスト新書90). KKベストセラーズ(2005)

- 4) たとえば「すすみ」について岩波古語辞典は「ススは、ススシキホビ、ススノミのススと同根。おのずと湧いて来る勢いに乗って進行、行動する意」と説明する。大野晋、佐竹昭弘、前田金五郎. 岩波古語辞典. 岩波書店(1974. 1990補訂版)
- 5) 石川忠久. 詩経 上(新釈漢文大系110. 牧角悦子執筆). 明治書院(1997)
- 6) 種村和史. イナゴはどうして嫉妬しないのか? - 詩経解釈学史点描一. 慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション, (35), 55-87 (2005)
- 7) 小泉弘. 身延山久遠寺本寶物集・卷二(貴重古典籍叢刊8 古鈔本寶物集所収). 角川書店(1973)
- 8) 国史大辞典編集委員会. 国史大辞典「萩の戸」の項(福山敏男執筆). 吉川弘文館(1990)
- 9) 河添房江. 『蜻蛉日記』、女歌の世界—王朝女性作家誕生の起源—(性と文化の源氏物語所収). 筑摩書房(1998)
- 10) 山中裕, 秋山虔, 池田尚隆, 福永進. 栄花物語①(新編日本古典文学全集). 小学館(1995), 455頭注11
- 11) 萩原広道『源氏物語評釈』は「夕顔ノ上は浮船ノ君に相照し對へたる書ざま」だとした上で「此夕顔ノ上も浮船ノ君もあまりに大どき過て立てたる心なくたゞよはしき人なるからにさるへんぐゑどもにもけどられたるなるべし」と述べている。
- 12) 木村正中. 若宮誕生—明石一族の宿運(1). (講座源氏物語の世界〈第六集〉所収). 有斐閣(1981)
- 13) 山中裕. 御堂関白記全注釈 長和元年(植村真知子執筆). 高科書店(1988). 思文閣出版から復刻出版(2012)
- 14) 保坂都. 大中臣家の歌人群. 武蔵野書院(1972)
- 15) 吉海直人. 平安朝の乳母達—源氏物語への階梯—. 世界思想社(1995)
- 16) 野村育代. 北条政子—尼将軍の時代(歴史文化ライブラリー 99). 吉川弘文館(2000)